

日本語教育

152 号

目 次

〔研究論文〕

継続的な文字チャットによる日本語学習者の終助詞「ね」の使用の変化 —必須要素／任意要素の観点から—	船 戸 はるな	1
日本の IT 企業のブリッジ人材に求められるビジネスコミュニケーション能力 —ソフトウェア開発中に発生するコミュニケーション上の問題分析から—	戎 谷 梓	14

〔実践報告〕

教室での対話をもたらす「本当に言いたいこと」を表現することば —発話の単声機能と対話機能に着目した相互行為分析—	広 瀬 和 佳 子	30
Speak Everywhere を統合したスピーキング重視のコース設計と実践	池田順子・深田淳	46
学習者から学ぶ「自律的な学び」とその支援 —漢字の一斉授業における取り組みから—	大関由貴・遠藤郁絵	61

〔コラム：海外の学会から〕		76
---------------	--	----

〔会務報告・2012 年度通常総会議決通知〕		81
------------------------	--	----

〔投稿規程〕		132
--------	--	-----

〔お知らせ〕〈『日本語教育』155 号特集テーマ、2013 年度春季大会研究発表規程、2012 年度秋季大会プログラム、研究集会予告、教師研修コース予告〉		138
---	--	-----

あとがき

◇152号では、2本の研究論文と3本の実践報告の合計5本の投稿論文が掲載されました。研究論文の1本目の船戸氏の論文は、日本語母語話者と学習者の文字チャットにおける終助詞の「ね」に着目して、学習者の使用の変化を分析したものです。日本語学習者がチャットを活用するというのは、日本語の使用環境が限られている海外では行われており、その効果を示そうとしたものです。2本目の戎谷氏の論文は、ITエンジニアと日本人従業員との間を仲介するブリッジ人材のコミュニケーション能力の問題を扱っています。

実践報告の1本目の広瀬氏の実践報告は、教室における学習者の対話を、学習者一人ひとりが論証のステップをどのように進め、自分の「言いたいこと」を表現しようとしたのかという教室の相互行為のプロセスとしてとらえて分析したものです。2本目の池田・深田氏の実践報告は、インターネットでアクセスできるスピーキングを重視した学習支援システムの開発と、授業と連動した実践に関するものです。3本目の大関・遠藤氏の実践報告は、漢字学習における自律的な学びを模索した記録で、その学習対象はインドネシア人看護師・介護福祉士候補生です。

今回掲載された5本の研究論文や実践報告を改めて眺めると、現在の日本語教育の実情を反映して、新たな日本語教育の現場や教育ツールとしてのメディアに関するものが集まっていることがわかります。152号では44本の投稿論文のうち、掲載に至った5本をのぞくと、12本が再投稿、27本が不採用となりました。2012年の9月3日締め切りの投稿分からはEメール投稿を受け付けています。国内の会員のみならず、海外からも投稿しやすくなるのではないかと思いますので、さまざまな分野から多くの投稿をお待ちしております。

(K.K)

学会誌委員 (◎印は委員長, ○印は副委員長)

〈編集担当委員〉

秋元 美晴	池上摩希子	宇佐美 洋
加納千恵子	小柳かおる	○齋藤ひろみ
○西口 光一	松尾 慎	築島 史恵
◎山内 博之		

〈主査担当委員〉

池田 伸子	石橋 玲子	小澤伊久美
門脇 薫	金田 智子	川口 義一
木谷 直之	小林 由子	小宮千鶴子
佐々木倫子	佐藤 琢三	杉村 泰
鈴木 智美	高梨 信乃	田崎 敦子
田中 和美	因 京子	鄭 惠先
仁科喜久子	深澤のぞみ	深田 淳
藤森 弘子	文野 峯子	許 明子
松見 法男	水田 澄子	三宅 和子
村岡 貴子	森本 郁代	横山 紀子
義永美央子		

査読協力者 (本号担当)

李 澤熊	池田 隆介	池田 玲子
伊藤恵美子	井上 優	今井 新悟
宇佐美まゆみ	歌代 崇史	大島 弥生
大関 浩美	大谷 晋也	小河原義朗
沖 裕子	鎌田美千子	河路 由佳
河野 俊之	木下 りか	久保田美子
熊谷 智子	小森早江子	近藤 彩
才田いずみ	坂本 正	實平 雅夫
澤田 浩子	嶋田 和子	新屋 映子
當作 靖彦	中川かず子	カズミ イリ
蓮沼 昭子	坂野 永理	フジ サクコ
福岡 昌子	福田 倫子	藤原智米美
ホウマ 総子	堀口 純子	真嶋 潤子
松本久美子	水野 義道	三牧 陽子
村上 京子	村田 年	八木 公子
柳町 智治	由井紀久子	横溝紳一郎
吉田 妙子		

編集協力者

エリク・ロング

◇投稿締切日

154号 2012年9月3日 (発行2013年4月)

155号 2013年1月10日 (発行2013年8月)

特集テーマ:

エンパワーメントとしての日本語支援

156号 2013年5月1日 (発行2013年12月)

2012年8月25日 印刷

2012年8月25日 発行

編集者 日本語教育学会学会誌委員会

発行者 社団法人 日本語教育学会

東京都千代田区西神田2-4-1

東方学会新館 〒101-0065

電話 (03)3262-4291

FAX (03)5216-7552

E-mail office@nkg.or.jp (代表)

gakkai@nkg.or.jp (学会誌委員会)

http://www.nkg.or.jp

継続的な文字チャットによる日本語学習者の 終助詞「ね」の使用の変化

—必須要素／任意要素の観点から—

船戸 はる な

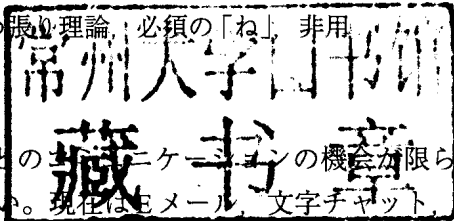
要 旨

本稿では、日本語母語話者との文字チャットを継続することにより、JFL環境にある日本語学習者の終助詞「ね」の使用がどのように変化をするか、またその変化は口頭での会話にも現れるか、という点について分析を行った。なお、学習者の「ね」の使用をより詳細に把握するため、使用された「ね」についての分析だけでなく、必須要素としての「ね」の非用という側面にも注目して分析を行った。

その結果、文字チャット開始初期の学習者の特徴として、「ね」の使用頻度が母語話者に比べ低く、「任意の『ね』」を多用する傾向が見られた。また、「必須の『ね』」の非用と見られる発言も多く見られた。

その後12週間の文字チャットを継続するに伴い、学習者の「ね」の使用頻度の増加、特に「必須の『ね』」の顕著な増加が見られ、同時に「必須の『ね』」の非用と見られる発言の減少も見られた。同様の変化は口頭での会話においても確認された。

【キーワード】 JFL, 文字チャット, 情報のなわ張り理論, 必須の「ね」, 非用



1. はじめに

JFL環境の日本語学習者は、日本語母語話者とのコミュニケーションの機会が限られており、日本語の話しことばに触れる機会は少ない。現在はEメール、文字チャット、インターネット電話等、多くの簡便で安価なコミュニケーション手段が普及しているものの、日本語教育の分野においてそれらが十分に活用されているとは言いがたい。

インターネット電話で日本語母語話者と会話を行うことができれば、日本語の話しことばに豊富に触れることはできるが、母語話者との即時性の高いコミュニケーションを音声で行うことは学習者にとって非常に負担が大きい。しかし文字チャットでは文字を介してコミュニケーションを行うため、学習者にとっては様々な負荷が軽減され、「よりストレスの少ないコミュニケーション」(松井2004)を行うことができると指摘されている。

日本語の話しことばの大きな特徴の1つに、終助詞が多く使用されることが挙げられる。話しことばにおいて終助詞の果たす役割は非常に重要なものであるが、学習者にとって終助詞を適切に使用することは難しい。中でも「ね」は、母語話者が会話の中で多く使用する傾向があることが多く指摘されており、使用される終助詞の約4割が「ね」であるという指摘もある(メイナード1993)。一方、学習者も「ね」を多く使用するが、他の終助詞

「よ」「よね」と正確に使い分けることが難しい、ということも多く指摘されている(メイナード1993, 白川1992, 初鹿野1994等)。学習者が日本語の話しことばを習得する上で、「ね」は一つの要点となるといえるだろう。

文字チャットで使用されることばは「限りなく話しことばに近い文字言語」(伊藤1993)であると指摘されており、終助詞も多く使用されている。そこで筆者は、日本語母語話者との継続的な文字チャットが、日本語学習者の終助詞「ね」の学習に影響を与えるのではないかと考えた。

2. 先行研究

2-1. 終助詞「ね」の機能について

終助詞「ね」の機能についてはこれまで多くの議論がなされているが、ここでは特に情報の共有性に注目したものと、話し手の情報処理過程に注目したものを取り上げる。

情報の共有性に注目した神尾(1990, 2002)は、話し手・聞き手・情報の三者間の「心理的距離」を尺度に用いた「情報のなわ張り理論」によって「ね」の機能を説明した。「情報のなわ張り理論」とは、「ある文のあらわす情報と話し手および聞き手との間に、一次元的な心理的距離の尺度を仮定し、「その距離は〈近〉または〈遠〉の二つにより測られる」とする、「なわ張り」と文型を中心に成立する理論」である。すなわち、話題となる情報が話し手または聞き手に〈近〉である場合、その情報は話し手または聞き手のなわ張りに属するとする。具体的には、以下のような情報である。

- a. 内的直接体験を表す情報
- b. 外的直接体験を表す情報
- c. 自己の専門または熟達領域に関する情報
- d. 自己の個人的情報

(神尾2002)

そして、「ね」には必須要素であるものと任意要素であるものがあるとし、文のあらわす情報が話し手と聞き手の双方のなわ張りの内にある場合は直接形に「ね」が付加されなければならない、情報が話し手のなわ張りの外にあり、かつ聞き手のなわ張りの内にある場合は間接形に「ね」が付加されなければならないと規定した。すなわち、「必須の『ね』」とは、このように情報が聞き手のなわ張りに属する場合の「ね」である。

したがって、「ね」の使用の適切さについては分析する際には、使用された「ね」が適切であるかどうかだけでなく、この必須の『ね』が適切に付加されているか、すなわち、情報が聞き手のなわ張りに属する場合の発話における「ね」の非用がないか、という観点も重要であるといえる。

一方、田窪・金水(1996, 2000)は話し手の情報処理過程に注目して「ね」を分析し、「終助詞『ね』は、当該の命題の妥当性を計算中であるという標識である」と定義した。すなわち、ある情報について述べる際に「ね」を付加するためには、その情報の妥当性について話し手自身の計算(確認)行為を必要とするようなものでなければならない、ということである。

2-2. 日本語学習者の終助詞「ね」の使用について

学習者の終助詞「ね」の使用を観察した研究の中で、Sawyer (1992) は JFL 環境における学習者との面接による調査を行い、「ね」の発達は、一般的な語彙や文法的助詞の発達よりも遅く、まず「そうですね」「そうね」のような定型的表现が習得され、その後徐々に生産的な文脈の中でも使用されるようになること、そして、使用される「ね」の機能には学習者間で差があることを明らかにした。

初鹿野 (1994) は、日本語学習者 4 人と教師との発話資料を基に縦断的に研究を行い、やはり学習初期には定型的表现の中で「ね」が使用される場合が多いことが明らかになったが、その使用は不適切なものが多かったとしている。また、「ね」の用法としては特殊なものと思われがちな「自分の状況、経験を述べるときに相手を話に引き込み、共感を得ようとする『ね』の使用」が多く、手当たり次第に「ね」をつける傾向のある学習者にはこの用法が習得しやすい可能性があることを述べている。

これらの研究によって、学習者が「ね」を適切に使用することが難しいことが明らかにされたが、「ね」の機能分類について明確な記述がないことや、母語話者との比較を行っていないことから、母語話者・学習者それぞれの「ね」の使用傾向が明らかになったとは言いがたい。また、これらは自然会話を対象としていないため、学習者の「ね」の使用の実態を反映しているかという点についても疑問が残る。

一方、学習者の自然会話を対象とし、「ね」のコミュニケーション上の機能に注目して分析した研究には張 (2005) と楊 (2008) がある。

張 (2005) は、台湾人日本語学習者と日本語母語話者の接触場面、そして日本語母語場面の会話データを対象に、「実際の会話における『ね』の『運用面における機能』」に注目して分析を行った。その結果、学習者の「ね」の使用頻度は日本語母語話者の半分以下であるが、コミュニケーション機能別に見た場合、学習者・母語話者ともに「注意喚起」「会話促進」の「ね」が全体の 8 割を占めたと述べている。

楊 (2008) は中日接触場面および日本語母語場面の二者間の初対面会話を対象とし、「ね」を伴う発話を「実質的な発話」と「相づち的な発話」に分類して分析を行った。その結果、日本語母語話者は「ね」を主に「相づち的な発話」として発しているのに対し、学習者は「相づち的な発話」と分類されるものが少ない、という結果を報告している。

しかしこの 2 つの研究は、「ね」を伴う発話のコミュニケーション上の機能に注目しているため、「ね」の使用の適切さという点に焦点を当てたものではない。

さらに、これらの先行研究は全て、使用された「ね」について分析したもので、「必須の『ね』」の非用にも焦点を当てて分析した研究は、管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、必須/任意要素としての「ね」という点に注目し、母語話者との継続的な文字チャットに伴う学習者の「ね」の使用の変化を分析する。

3. 本研究の目的と研究課題

本研究では、日本語母語話者との継続的な文字チャットによって日本語学習者の終助詞「ね」の使用がどのように変化していくか、そしてその変化は学習者の口頭での会話にも影響を与えるか、という点を明らかにすることを目的とし、次の 3 つを研究課題とする。

研究課題1.

文字チャット開始初期、日本語母語話者と日本語学習者の「ね」の使用にはどのような違いがあるか。

研究課題1-1.

それぞれの終助詞「ね」の使用頻度には違いがあるか。

研究課題1-2.

それぞれの使用する終助詞「ね」の機能にはそれぞれどのような特徴があるか。

研究課題2.

日本語母語話者との継続的な文字チャットにより、文字チャットにおける日本語学習者の終助詞「ね」の使用はどのように変化するか。

研究課題3.

音声会話における日本語学習者の「ね」の使用に、研究課題2.と同様の変化は現れるか。

4. 研究方法

4-1. 調査の概要

本調査は、台湾在住の中国語母語話者日本語学習者（以下NNS）10名、日本在住の日本語母語話者（以下NS）10名の2人1組、計10組を対象に行った。NNSは全て、日本での長期滞在経験がなく、また日常生活で日本語母語話者と会話をする機会のない日本語学習者である。またNSは全て、日本の大学に通う10代後半～20代前半の女子学生であり、各組のNSとNNSの間に面識はない。各NNSの日本語能力等については、下記の通りである。

表1 NNSの属性

	年齢	性別	職業	旧日本語能力検定試験取得級
NNS1	20代前半	女性	会社員	2級
NNS2	10代後半	女性	大学生	3級
NNS3	20代前半	男性	大学院生	3級
NNS4	20代前半	女性	大学生	2級
NNS5	20代前半	男性	大学生	1級
NNS6	20代前半	男性	大学生	1級
NNS7	20代前半	女性	大学生	3級
NNS8	20代前半	女性	研究員	2級相当(大学内の模擬試験)
NNS9	10代後半	女性	大学生	2級
NNS10	20代前半	男性	大学院生	1級

各組に1週間に1回、約1時間の文字チャットを計12回行ってもらい、1回目の前、6回目の後、12回目の後に、約15分のskypeでの音声会話の録音を行った。筆者は、調査

初回に時間についてのみ指示（文字チャットは約1時間、音声会話は約15分）を出し、会話の開始・終了や、話題の選定などはすべて対象者の間で自由に行われた。

4-2. 分析方法

4-2-1. 分析手順

前節の調査で得られたデータを、以下の手順で分析を行った。

- (1) 文字チャットデータ、音声会話の文字化資料に現れた「ね」を抽出し、全NNSの各回における使用頻度を算出。なおNNSとの比較対象として、NSの1回あたりの「ね」使用頻度の平均を算出した。
- (2) (1)で抽出した「ね」についてコーディングを行い、使用された「ね」の中に占める割合を算出。
- (3) 次に全文を対象に、必須要素としての「ね」が欠けていると判断される発言を抽出し、全文における頻度を算出。

なお本研究では、下記の場合を除き、1送信を1文としてカウントした。

- ①1回で送信された発言の中で、末尾以外にも句点・感嘆符・顔文字が含まれる場合は、その句点・感嘆符・顔文字を文の区切りとする。

(会話例1:2文としてカウント)

1503 NS2 普通の会社に入ることも考えてます。でも、院に進みたいとも思います。

- ②1人の対象者が連続して複数の発言を送信し、前の発言の末尾に句点・感嘆符・顔文字がなく、直後の発言との間に因果関係がある場合や、主述の対応関係がある場合は、連続した1文とする。

(会話例2:1文としてカウント)

1003 NS1 自分ではうまく言ってるつもりなんだけど、

1004 NS1 先生には全く違うように聞こえるみたい^^;

4-2-2. コーディング基準

先行研究に基づき、「ね」の必須/任意の判断について以下のように規定する。

- ①聞き手と共有されているか、または聞き手の領域に属していると仮定される情報について述べる場合には、「ね」は必須である。
- ②聞き手の領域に属していない情報を述べる際には、「ね」は任意である。ただし、その情報の妥当性について話し手自身の確認（計算）行為を必要としない場合には、「ね」は使用できない。

そして、必須/任意の「ね」の各機能を分類し、誤用、非用を加えて下記のようにコーディング項目を設定した（表2）。

なお本研究では、必須要素としての「ね」である「同意表明」「同意要求」「確認要求」が付加された発言と、上記のように必須要素としての「ね」の非用と判断される発言を合わせたものを、「『ね』の付加が必須である発言」と考える。

表2 コーディング項目

正用	必須の「ね」	同意表明	相手の発言に同意を示す「ね」 〈例〉うん!! そうですね!
		同意要求	相手に同意を求める「ね」 〈例〉この問題は難しいね!
	確認要求	話し手にとって不確実なことについて相手に確認を求める「ね」 〈例〉来週のチャットは19時からですね?	
	任意の「ね」	自己確認	話し手が、聞き手のなわ張りに属していない情報について何らかの確認を行いながら述べる「ね」 〈例〉私は野球はあまり見ませんね
誤用	誤用		情報が聞き手のなわ張りに属しておらず、かつ話し手自身の確認(計算)行為を必要としないものである際に付加された「ね」 〈例〉嫌いなものもありますよ。私は納豆を食べられないんだね
非用	必須の「ね」非用		聞き手のなわ張りに属する情報に「ね」が付加されていない文 〈会話例〉 A: 私は今年の4月まで北海道にずっと住んでいました。 B: 北海道に行きたい! 夏のときは北海道がとてもきれいだそうですね! (北海道はAの出身地であり、情報はAのなわ張りに属している。また、Bは北海道を訪れたことはない。したがってBは本来「きれいだそうですね」と「間接ね形」を用いるのが適切)

コーディングは、文字チャットデータ・音声会話の文字化資料の10分の1について、筆者の他に1名の日本語教師で独立に行い、結果についてコーエンのカップ係数を求めた。その結果、全ての項目について $k=0.8$ 以上であることが確認されたため、コーディングの信頼性は高いと判断し、残りのデータについては筆者がコーディングを行った。

5. 結果と考察

5-1. 文字チャット開始初期におけるNSとNNSの「ね」の使用

本節では、「研究課題1.文字チャット開始初期、日本語母語話者と日本語学習者の「ね」の使用にはどのような違いがあるか」の結果について述べる。以下図1・2は、全NNS1回目の文字チャットの総文数・音声会話の総発話文数に対する「ね」の割合と、全NSの1回あたりの同割合との比較を表すグラフである。

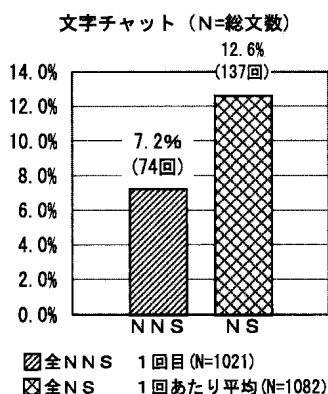


図1 「ね」使用頻度(文字チャット)

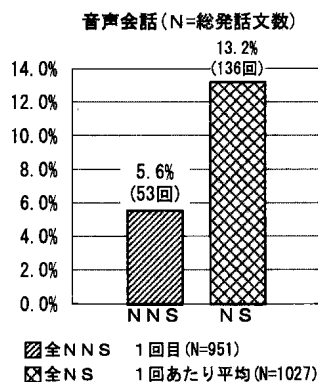


図2 「ね」使用頻度(音声会話)

これらの図から、文字チャット・音声会話とも、NNSの「ね」の使用頻度はNSよりかなり低いことがわかる。

次に、使用された「ね」を機能別にコーディングし、全NNS1回目の「ね」の機能別使用内訳と、全NSの1回あたりの同内訳との比較をしたものが以下図3、4である。

文字チャット (N=使用された「ね」の総数)

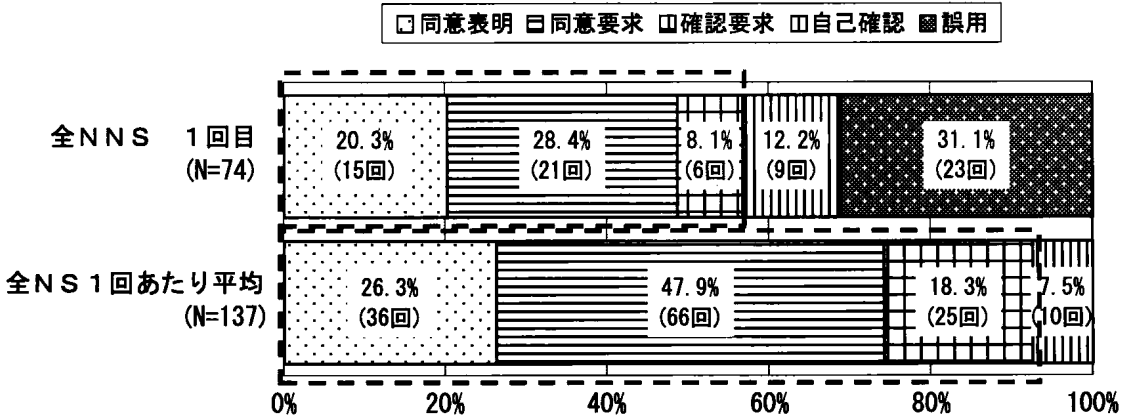


図3 「ね」機能の使用内訳 (文字チャット)

(□ ▨ ▩ ▧ は必須の「ね」)

音声会話 (N=使用された「ね」の総数)

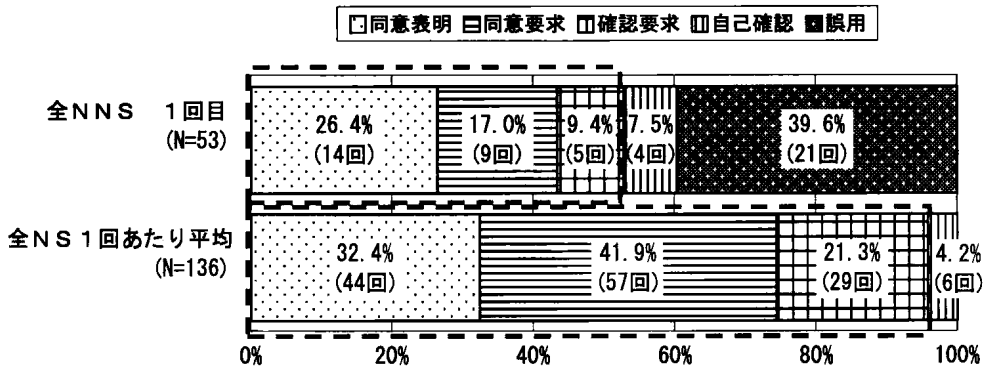


図4 「ね」機能の使用内訳 (音声会話)

(□ ▨ ▩ ▧ は必須の「ね」)

上記の図を見ると、NSで最も多く使用されている機能は、文字チャット・音声会話共に「同意要求」、次いで「同意表明」「確認要求」となっており、どちらにおいても「聞き手のなわ張りに属する情報」に付加された「ね」(必須の「ね」)が9割以上を占めていることがわかる。

一方NNSでは、「誤用」であるものが最も多く、2番または3番目に「同意表明」「同意要求」と続く。また、「自己確認」はNSの2倍近い傾向にある。

カイ二乗検定の結果、NSとNNSの「ね」の機能別使用内訳について、文字チャットと音声会話のどちらにおいても有意差が見られた(文字チャット： $\chi^2(4)=52.490, p<.01$ 、音

声会話： $\chi^2(4)=68.788, p<.01$ 。さらに残差分析を行った結果、同意表明、自己確認については有意差がなかったが、同意要求と確認要求については、NNSはNSより有意に低いことが明らかになった。

NNSの「誤用」の例を見ると、以下のように、情報が聞き手のなわ張りに属さず、かつ話し手の確認行為を必要としていないにも関わらず「ね」を付加したものである。

(会話例3)

4132 NS8 NNS8さんは、自分のハンドルネーム気に入らないの？

4133 NNS8 今のネームは、私が付けたんじゃないだね。

このように、NNSの使用した「ね」には、聞き手のなわ張りに属さない情報に付加された「ね」（「自己確認」、「誤用」）が多く、文字チャットでは「ね」全体の43.3%（74回中32回）、音声チャットでは47.1%（53回中の25回）を占める。

次に、必須の「ね」の非用という観点から見ると、NNSの1回目の会話の中には、必須の「ね」の非用と考えられる発言が、文字チャットで計25回、音声会話で計32回観察された。したがって、「『ね』の付加が必須である発言」は、文字チャットでは67回（必須の「ね」42回＋必須の「ね」非用25回）、音声会話では60回（必須の「ね」28回＋必須の「ね」非用32回）となる。このことから、NNSは「『ね』の付加が必須である発言」のうち、文字チャットでは62.7%（67回中の42回）、音声会話では46.7%（60回中の28回）しか「ね」を付加していないことが明らかになった。

対象の10組全てにおいて、NNSは「ね」の使用頻度・必須の「ね」の使用頻度ともにNSより低く、これらの傾向は性別や調査開始初期の日本語能力に関わらず、どのNNSにも共通している傾向であるといえる。

以上のことから、NSはNNSに比べ「ね」の使用頻度が高く、また基本的に必須の「ね」、即ち、情報が聞き手のなわ張りに属する場合に「ね」を使用しているのに対し、NNSは必須の「ね」を適切に使用できておらず、更に（適切／不適切に関わらず）情報が話し手のなわ張りに属する場合に「ね」を多用するという、全く異なった傾向が観察された。

5-2. 文字チャットにおける「ね」の使用の変化

本節では、「研究課題2.日本語母語話者との継続的な文字チャットにより、文字チャットにおける日本語学習者の終助詞『ね』の使用はどのように変化するか」の結果について述べる。

以下図5は、文字チャットにおける「ね」の使用頻度の推移を示したものである。

この図から、NNSの「ね」の使用頻度は大幅に増加していることがわかる。1回目と12回目について、それぞれの「ね」の使用頻度を対応のある*t*検定で分析した結果、有意差が見られた。（ $t=3.213, df=9, p<.05$ ）

次に、使用された「ね」の機能ごとの変化を見る。

上記図6は、「ね」の機能別使用内訳の推移を示したものである。必須の「ね」のうち、「同意要求」「同意表明」の使用頻度が増加していることがわかる。

さらに、必須の「ね」の非用と考えられる発言は12回目の文字チャットでは6回に減少しており、「ね」の付加が必須である発言82回（必須の「ね」76回＋必須の「ね」非用6回）

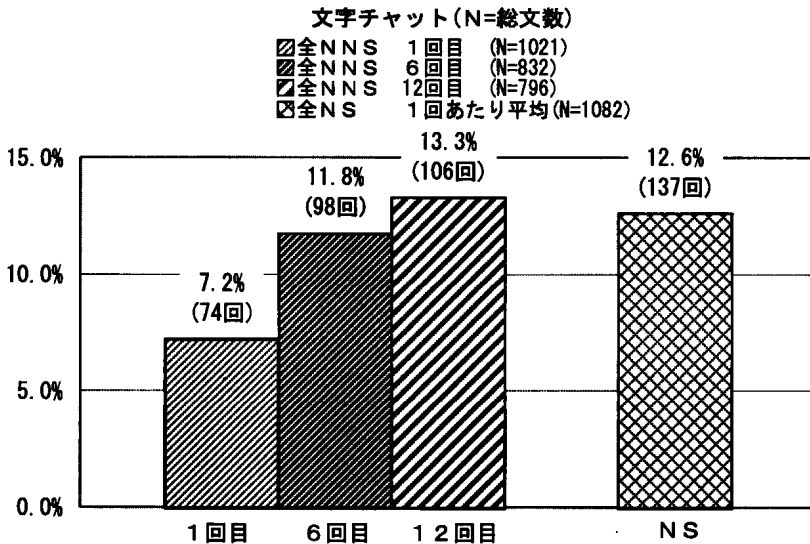


図5 「ね」使用頻度 全NNS1回目-6回目-12回目比較 (文字チャット)

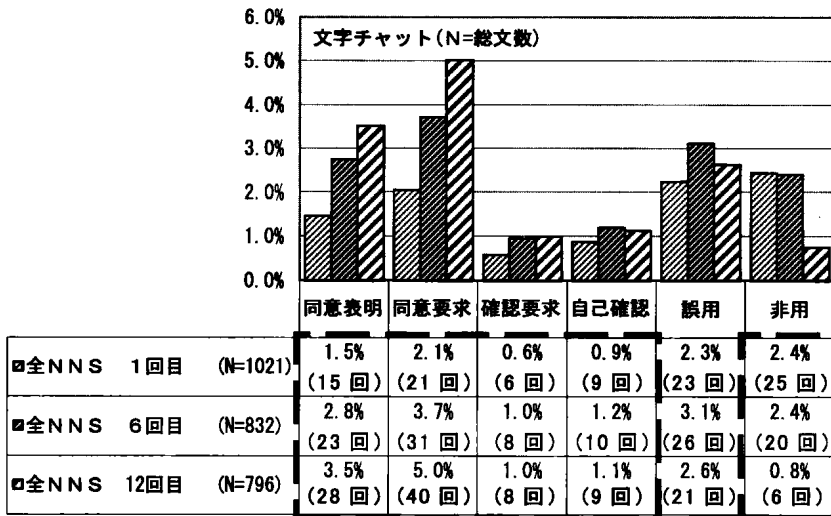


図6 「ね」機能別使用頻度 全NNS1回目-6回目-12回目比較 (文字チャット)

(【二二】は「ね」の付加が必須である発言)

のうち、92.7% (82回中の76回)に「ね」を付加していることがわかる。

このように、文字チャットにおける日本語学習者の終助詞「ね」の使用について、使用頻度の増加、特に必須の「ね」が増加という、母語話者の使用の特徴に近づいているといえる変化が明らかになった。

5-3. 音声会話における「ね」の使用の変化

本節では、「研究課題3. 音声会話における日本語学習者の『ね』の使用に、研究課題2と同様の変化は現れるか」の結果について述べる。

前節で述べた文字チャットにおける変化と同様の変化は、音声会話においても観察された。音声会話における「ね」の使用頻度の推移を以下図7に示す。

音声会話 (N=総発話文数)

- ▨ 全NNS 1回目 (N=951)
- ▩ 全NNS 2回目 (N=895)
- ▧ 全NNS 3回目 (N=1297)
- 全NS 1回あたり平均 (N=1027)

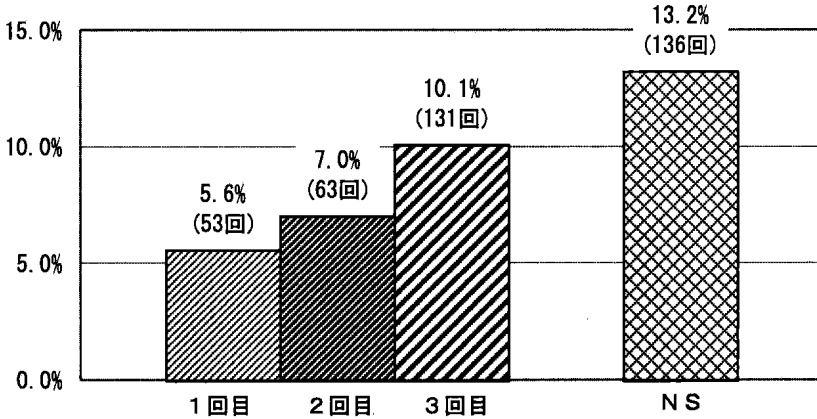


図7 「ね」使用頻度 全NNS1回目-2回目-3回目比較 (音声会話)

この図から、音声会話においても「ね」は増加傾向にあることがわかる。1回目と3回目について、それぞれの「ね」の使用頻度を対応のある *t* 検定で分析した結果、有意差が見られた。 $(t=3.900, df=9, p<.05)$

また、音声会話において使用された「ね」の機能別使用内訳の推移を見ると、文字チャット同様、「同意要求」と共に「同意表明」の使用頻度の顕著な増加が見られた。(図8)

音声会話 (N=総発話文数)

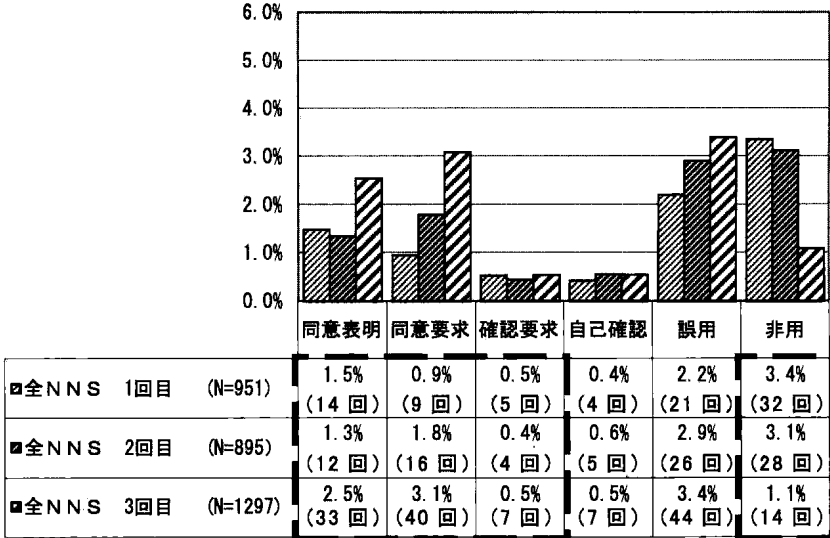


図8 「ね」機能別使用頻度 全NNS1回目-2回目-3回目比較 (音声会話)

(▨ ▩ ▧) は「ね」の付加が必須である発言

ただし文字チャットとは異なる変化として、「ね」の誤用の増加も見られた。この原因として、自らの発話を推敲する時間的余裕のない音声会話においては、「ね」を適切に使用することが文字チャットよりも難しいことが考えられる。したがって、回を追うごとに

「ね」の使用頻度は増加するものの、適切／不適切の判断が不十分なままに「ね」を付加してしまい、結果として「ね」の誤用が増加した可能性がある。

その一方で、必須の「ね」の非用と考えられる発言の顕著な減少も見られた。1回目の音声会話では、「ね」の付加が必須である発言のうち46.7%にしか「ね」を付加していなかったが、3回目になると、「ね」の付加が必須である発言94回（必須の「ね」80回＋必須の「ね」非用14回）のうち、85.1%（94回中の80回）に「ね」を付加するようになっていたことが明らかになった。

以上のように、文字チャットにおいて見られた、「ね」の使用頻度の増加、特に必須の「ね」が増加というNNSの「ね」の使用の変化は、音声会話においても観察された。文字チャットとは異なり、「ね」の誤用の増加という変化も見られたが、必須要素の「ね」の使用には大きな向上が見られたといえる。

6. まとめ

本研究では、まず文字チャット開始初期のNSとNNSの「ね」の使用の違いを明らかにした。その結果、NNSの特徴として、

- ①NSに比べ「ね」の使用頻度がかなり低い。
- ②話し手の領域に属する情報を述べる際に「ね」を使用することが多く、またその適切／不適切の判断が正しく行われていない。
- ③必須の「ね」（聞き手の領域に属する情報に付加される「ね」）が適切に付加されていない。

という3点が観察された。

次に、NNSの「ね」の使用の変化を文字チャットのログにおいて分析したところ、「ね」の使用頻度の増加、特に必須の「ね」の増加が見られ、NSの「ね」の使用の特徴に近づいているといえる変化が明らかになった。これはNSとの文字チャットの継続による変化であると考えられる。

同様の変化は、音声会話においても確認された。「ね」の使用頻度の増加に伴い「ね」の誤用の増加も見られたものの、必須の「ね」の非用と考えられる発言は顕著に減少しており、必須要素としての「ね」の使用には大きな改善が見られた。聞き手のなわばりに属する情報について発言する際には「ね」が必須であることを学んだといえるだろう。

終助詞は、「教科書においても授業においても、十分な説明がなされているとはいえない」（福島1994）と指摘されているように、他の学習項目に比べ指導されることは少なく、本研究の調査対象者であるNNSも、この12週間の間に終助詞についての指導は受けていない。また本調査外では日本語母語話者と接しておらず、日本の漫画・TV番組も日本語での視聴はしていない。したがって、本調査外でNNSが終助詞「ね」の使用に影響を受けた可能性は少なく、本研究で見られたNNSの終助詞「ね」の使用の変化は、NSとの文字チャットでの会話を重ねる中で得られたものである可能性が高い。今後は、文字チャットの持つ様々な特性を整理した上で、どのような特性が学習者に影響を与えるのか、また文字チャットは学習者の終助詞使用以外にも影響を与えるのか、という点について、さらに詳細な分析を加えたい。

本研究では、母語話者との文字チャットの継続は、学習者の口頭での会話における終助詞「ね」の適切な使用にも影響を与える可能性が高いことが明らかになった。インターネット環境さえあれば、どのような場所においても利用しやすい文字チャットが、学習者の口頭での会話にも効果があるという可能性を示したことで、今後のJFL環境の学習者への新しい学習方法を提示する一助となれば幸いである。

謝辞

本稿執筆にあたり、貴重なご助言をくださったお茶の水女子大学の佐々木泰子先生、ゼミの方々、査読の先生方に、心より感謝いたします。

参考文献

- (1) 伊藤雅光 (1993) 「チャットと呼ばれる電子のおしゃべりについて」『日本語学』12-13, 55-62
- (2) 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店
- (3) 神尾昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』大修館書店
- (4) 白川博之 (1992) 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77, 36-48
- (5) 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- (6) 田窪行則・金水敏 (1996) 「対話と共有知識—談話管理理論の立場から」『言語』25-1, 30-39
- (7) 田窪行則・金水敏 (2000) 「複数の心的領域による談話管理」『認知言語学の発展3巻』坂原茂, ひつじ書房, pp. 251-280
- (8) 張鈞竹 (2005) 「台湾人日本語学習者の終助詞『ね』の使用—コミュニケーション機能を中心に—」『言語情報学研究報告』6, 281-299, 東京外国語大学
- (9) 初鹿野阿れ (1994) 「初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察—『ね』を中心として—」『言語文化と日本語教育』8, 14-25
- (10) 福島悦子 (1994) 「終助詞「ね」の用法と機能：指導上の留意点」『東北大学留学生センター紀要』2, 55-62
- (11) 松井聖一郎 (2004) 「韓国朝鮮語教育における「文字チャット」の活用」『言語文化』7—特集号, 157-166
- (12) 楊虹 (2008) 「中日接触場面の初対面会話における「ね」の分析：共感構築の観点から」『研究紀要』15, 125-136 東京成徳大学
- (13) Sawyer. M. (1992) *The Japanese sentence-final particle Ne, Pragmatics of Japanese as Native and Target Language*, 95-125, Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa

(お茶の水女子大学)

Change in JFL Learners' Use of Final Particle *ne* from Prolonged Use of Online Chat: Focusing on Obligatory *ne* versus Optional *ne*

FUNATO Haruna

This study investigates how JFL learners' use of the final particle *ne* changes from prolonged use of online chat, and whether the change appears in oral conversation as well. To clarify the use of final particle *ne* in more detail, this study focuses not only on actual instances of *ne*, but also on the non-use of *ne* when its use is obligatory.

The results show that in initial chat sessions, compared to native speakers, learners had a considerably lower frequency of *ne* altogether, but a greater frequency of optional *ne*. Furthermore, utterances that could be viewed as the non-use of obligatory *ne* were also frequently observed.

After 12 weeks of chat sessions with native speakers, the learners' use of *ne*, especially obligatory *ne*, increased. On the other hand, the utterances that could be viewed as non-use of obligatory *ne* decreased. Similar change was also indicated in oral conversation.

(Ochanomizu University)

日本のIT企業のブリッジ人材に求められる ビジネスコミュニケーション能力

—ソフトウェア開発中に発生する コミュニケーション上の問題分析から—

戎 谷 梓

要 旨

日本企業でのインド人ITエンジニア (IE) の増加に伴い、IEと日本人従業員 (JCW) とのコミュニケーションを仲介するインド人ブリッジ人材 (IBR) も増加している。IBRは、高度な日本語能力を有するものの就業中に問題を抱えている。本研究では、IBRが就業企業のプロジェクト遂行方法を理解し、適切に情報授受を行うための能力に関して示唆を得るため、IBR、JCW、IEに行ったインタビューの回答に基づいて製品開発中の情報授受全体の枠組みを示した。そこで発生する問題の分析の結果、「ビジョン共有」のためにJCWの必要とするIEの開発状況などの情報を、IBRがIEから受け取ることが困難であることが分かった。これはIEのビジョン共有の目的に関する理解不足が原因と考えられるため、IBRには、JCWとIE間のコミュニケーションを調整し、双方に他者の方法の長所に関する理解を促しつつ情報授受を行う能力が求められる。

【キーワード】 ブリッジ人材、ビジネスコミュニケーション能力、超重複型フェーズ、関係者総動員での開発、ビジョン共有

1. はじめに

近年、アジア諸国の人材の移動が著しい。日本においても、2001年2月以降、IT産業が盛んなインドからITエンジニアを日本の企業で雇用し、日本のIT産業の活性化が図られてきた(増田2002)。一方、日本企業のインド人ITエンジニアの増加に伴い、彼らと企業の日本人の間のコミュニケーション上のサポートのため、翻訳や通訳を主に行うインド人人材の雇用も行われている(戎谷2009)。本研究では、このようなインド人人材を、日本とインドとの架け橋の役割が特徴的であることから「ブリッジ人材⁽¹⁾」と呼ぶ。

これまで、基本的に日本企業には日本語が堪能な外国人が翻訳者および通訳者として雇用されてきた。しかし、企業によっては、海外企業とのビジネスをより効果的に遂行する目的で、コミュニケーション上のサポートを行う人材を製品開発プロジェクトのメンバーとみなし、積極的な意見提示や提案を求めるようになった。本研究のインド人ブリッジ人材(以下、「IBR」)の役割も、インド人ITエンジニア(以下、「IE」と)日本人従業員(以下、「JCW」と)の間での翻訳・通訳業務に加えて、プロジェクトの立ち上げおよび遂行中に必要な文書の作成、顧客への営業、インドの下請け企業との関係維持のための提案

など、日本企業とインド企業との間でビジネス活動を円滑化することと捉える。IBRは、就業前に長期の日本語学習経験があり、高い日本語能力を有するものの、企業での就業場面では情報の授受の相手やタイミングなどが分からず、プロジェクト推進上関係者間で共有すべき情報の授受が円滑に行えていない(戎谷2009)。これは、IBRにとって、企業で遂行される業務の全体像をイメージすることが困難であるためと言える。このような問題が改善されなければ、プロジェクト自体が滞る可能性もあるため、IBRは、業務遂行上、プロジェクト中のコミュニケーション活動を把握する必要があると言える。

本研究では、IBRと関係者へのインタビューの回答をもとに、協力を得たIT企業における製品開発プロジェクトと、プロジェクト中に行われる関係者間のコミュニケーションの全体像を示す。そして、JCWとIEとの間で橋渡しの役割を果たすIBRが業務上抱える問題を特定し、その対処方法を分析することにより、IBRが日本企業で円滑にコミュニケーション上のサポートを行うための能力について考察する。本研究のケーススタディは、来日してIT企業に就業する外国人に業務の全体像を把握させ、チームやプロジェクトにおける自分の立ち位置を意識化させる上で効果的であると言える。プロジェクト全体をメタ的に見ることができれば、何らかのコミュニケーション上の問題発生時に、先を見通した対処・解決を行いやすくなると考えられる。このような俯瞰的視野は、ビジネス日本語教育で場面別の日本語表現等の指導を行う以前に、学習者に獲得させることが重要である。

2. 先行研究の概観と本研究の位置づけ

本研究では、個々のビジネス上の場面における発話コミュニケーションを取り上げるのではなく、本研究の調査協力企業が行う製品開発プロジェクトの過程で行われる情報授受の全体像を示し、その中でブリッジ人材が行う必要のあるコミュニケーションに関して考察する。そこで、以下では、企業経営学の分野における先行研究も参照し、企業でのコミュニケーションを捉える一つの指標とする。本章では、昨今特に盛んになってきたビジネス日本語教育関連の研究も含めて先行研究を概観し、「ビジネスコミュニケーション能力」を定義した上で本研究の位置づけを行う。

2-1 ビジネス日本語教育に関連する先行研究

ビジネス日本語教育研究の変遷をまとめた李(2002)によれば、来日して企業に就業する外国人に対するビジネス日本語教育は1980年代から始まり、1990年代以降、関連の研究が盛んに行われるようになった(2002:245)。例えば、アジア5都市のビジネス日本語ニーズの調査(島田・澁川1999)、ビジネス上の接触場面での問題分析(近藤1998)、特定のビジネス場面の表現に関する研究(池田2003)などが挙げられる。これらの研究では、日本国内およびアジア諸国でのビジネス日本語教育の必要性に加え、外国人従業員が就業環境に適した方法でコミュニケーションを行う必要性が強調されてきた。

一方、ビジネス日本語の教育実践に基づく研究や、ビジネス日本語教育シラバスの設計のための研究も数多く行われている(高江洲・中川2009、堀井2008、奥田2011など)。その中でも、堀井(2008)は、ビジネス日本語を大学教育と関連付け、留学生のキャリア形